

# 木戸池温泉物語

## ◇庶民の道：信州と上州とを結ぶ草津街道

その昔、白根山を中心にした修験行者の往来の歴史をもつ草津街道は山道七里(28km)の庶民の道でした。標高二一七二mの渋峠を越え、信州(長野県)側では「草津道」、上州(群馬県)側では「沓野道」とか「渋湯道」と呼ばれて、善光寺詣りと草津温泉とを結ぶ庶民の道として親しまれ利用された、庶民の古道でした。

もともと上州と信州とを結ぶ街道は、むしろ鳥井峠と菅平を経て結ぶ街道が主流で、草津街道は脇道の役割を果たし、文化・文政の頃、渡世人国定忠治がこの草津峠を経て信州へ逃れた話は有名。また信州の俳人、小林一茶も江戸往復には幾度もこの草津道を使っています。

その後、長い歳月の中で沓野山(現・志賀高原)は松代藩の所領となり、明治維新の折りは国有地に編入されるなどの歴史を重ねながら、昭和四年には「志賀高原」と命名され、昭和二十四年には「上信越高原国立公園」に指定を受けました。そして昭和四十年、さまざまな努力の末、かつての草津街道とつかず離れず、今日に見る「志賀草津高原ルート」の開通を迎えたのです。

## ◇幕末の志賀高原と佐久間象山

古くから志賀高原は沓野山と呼ばれていました。慶長二年(一六五五年)、松代城主松平忠輝が鷹狩り用の鷹を保護、育成する地として「沓野・巢鷹山」が歴史に登場しました。その後、嘉永元年(一八四八年)、幕末の先覚者として知られる松代藩の佐久間象山が、鉱物資源や造林開発などの調査で、沓野山に度々入山しています。

象山の「沓野日記」の中で「…手を浸してこれを試みるに果してよき温泉なり…」と、温脈を発見した記録です。またふもとの住民に入山権を与え、竹細工や温泉の湯脈なども教え、志賀高原開発の祖となる恩恵をほどこしてくれました。木戸池に隣接する湿原で、田植えを試みたところから田ノ原と名付けられた開拓の跡や蓮池に立つ「佐久間象山顕彰碑」。渋池湖畔の「象山の森」などこの地の恩人を偲んで命名されています。その後、この精神は「和合会」と言う自主組織に引き継がれています。



佐久間象山

## 木戸池温泉(小林信義)のあゆみ

- 明治36年 3月25日 当ホテル創設者小林信義、父作次郎の四男として誕生
- 大正14年11月 黒岩角太郎の次女タツノと結婚
- 昭和 8年12月 木戸池湖畔に「志賀ヒュッテ」を自力で建設
- 昭和14年 7月 ボートを数隻購入し木戸池に浮べる
  - ◇ 11月 温泉発掘を開始するが失敗
- 昭和16年11月 再び温泉発掘を試みる。湯温が低く失敗
- 昭和17年11月 木戸池～硯川間に飲料水の水路を完成させる
  - ◇ 12月 「内湯・志賀旅館」に名称を変更する
- 昭和19年 3月 木戸池にワカサギの卵を放流し養殖を始める
- 昭和23年 7月 木戸池湖畔にキャンプ村を開設
- 昭和28年10月 第3期温泉ボーリングより50度の温泉湧出に成功
- 昭和30年11月 新館を増築、「木戸池温泉ホテル」に名称を変更する
  - ◇ 12月 ホテル横の前山に両面スキーリフト架設
- 昭和33年 9月 「横手山リフト株式会社」創設
  - ◇ 12月 「硯川～陽坂間」スキーリフト架設
- 昭和35年 9月 ホテル本館の新装
- 昭和38年12月 「硯(のぞき)～横手山頂間」スキーリフト架設
- 昭和39年12月 「陽坂～彦兵衛尾根間」スキーリフト架設
- 昭和42年 8月 「硯(のぞき)～山頂リフト間」スカイレーター架設
- 昭和44年 6月 財団法人「和合会」の評議員に推される
  - ◇ 10月 新たにボーリングを行い65度の現在の源泉を掘り当てる
- 昭和46年 8月 ホテル前に小林信義の顕彰像が建立される
- 昭和51年 2月 8日 小林信義、永眠する。享年71年

## 受賞

- 昭和48年 5月 3日 長野県知事より産業功労章を受賞
- 昭和50年 6月 1日 運輸大臣より索道振興章を受賞
- 昭和51年 2月 8日 勲五等瑞寶章を受賞



政府登録国際観光旅館

# 木戸池温泉ホテル

〒381-04 長野県下高井郡山ノ内町志賀高原木戸池  
☎0269(34)2821





## ◆大自然に魅せられて

ここ木戸池温泉ホテルの表玄関脇に、一体の銅像が立っています。この像は腕を組み志賀山の方角を見据えるように立つ野良姿の鑄鉄製で、実は当木戸池温泉ホテルの初代当主、小林信義の像なのです。

これは時の代議士小坂善太郎氏をはじめ、大勢の後援者の人々が、こばみ続けた本人を説き伏せ志賀高原のパイオニアをたたえる像として、信義晩年の昭和四十六年に建立されました。

小林信義は、父作治郎・母くにとの四男として志賀高原のふもと、杓野(現・山ノ内町杓野)に産声をあげました。農業のかたわら二十才まで茅葺き屋根職の父を手助けし、その後二年間、東京に出て当時流行のトタン屋根の技術修業を重ね、故郷杓野に帰って来ました。

そして同郷杓野の黒岩角太郎氏の次女タツノと結婚。しかし希望とはうらはらに、雪国のつね、半年もの冬期間、屋根職は休業状態が続き、くる日もくる日も降り積る雪を眺め、炬を囲んでの妻との話題は、冬も思う存分働いてみたいという事だけでした。彼は少年期から杓野山(現・志賀高原)が遊びの庭であり、父の山仕事を手伝った経験から次第に「大自然の中で暮したい」との想いをつのらせました。

## ◆木戸池湖畔に「志賀ヒュッテ」の灯

こんな日々のなか彼は意を決し、志賀高原を管理する自治組織「和合会」にヒュッテの建設案を具申したが、全く無謀と誰にも信用されませんでした。その頃の志賀高原と言えば、発哺と熊の湯に湯の宿があるくらいで山また山の中。しかし彼は天与の大自然を有する志賀高原の未来の発展を熱く訴え、木戸池周辺が街道の要所にもなり得ると、具体的な主旨と図面を提出し、何度も説明の末、ついに当時の理事長の心を動かし承認されたのです。

こうして、ヒュッテ建設に着手できたのは昭和八年、木材は「和合会」の厚意に山の本を使うことができましたが、他の建設資材はすべて馬の背で杓野から荷上げをし、当時の金で五百円の自己資金と縁者や友人の厚い援助金二百円による船出でした。

歳月を経て、すべて手造りの小さな山小屋はついに木戸池湖畔に完成。玄関口は現在ホテルの真裏にあたる草津街道に面して建てられ「志賀ヒュッテ」と命名されました。

けれども家族的な温もりが売りものの湖畔の宿は、一泊三食付一円の時代とは言え交通が不便なため、訪れる人はまばらで苦難な歳月が続きました。彼は収入源の不足を補うため、夏の間は杓野に下り屋根職を続け、山に戻っては、飲料水を求め、遠く硯川の水源地从木やトタンの水溝を自力で引いてつくり続け、その距離は三、二七メートルにも達しました。こんな暮らしの中でも幼子を背にした妻がせつせと手打ちそばを作って久し振りの客をもてなす姿に勇気づけられました。



開業当時の志賀ヒュッテ

## ◆苦悩の日々と夢の温泉

ある夏の盛り、いくつかのグループが「これが志賀ヒュッテだ」と大声で話しながら、熊の湯温泉の方へと通り過ぎて行きました。それを聞き彼は、志賀ヒュッテは単に通過地点の目印に過ぎないのかと苦悩し、温泉発掘の夢がふくらんでいきました。たまたま志賀山の中腹で湯気が立ち昇っているとのスキーヤーの情報をもとに、一〇メートルの横穴を掘ったが失敗。諦めず地質学者に木戸池一帯の調査を依頼、温泉脈があるという結論に再度、五〇メートルのボーリングに挑戦しましたが、これも失敗。

さすがに資金も底をつき、加えて太平洋戦争が勃発、隠忍十年の苦悩が続く歳月の間も、手をこまねいていたのではなく、十数隻の中古のボートを買付け木戸池に浮かべたり、諏訪湖から五十万粒のワカサギの卵を木戸池に放流、養殖を始めました。

やがて戦争が終り、健康的で安価なレクリエーションの場を高原に求め始める若者達に、志賀ヒュッテに泊り込む姿も増えてきました。

## ◆ついに五〇度の湯脈が

いつしか四十歳を過ぎた彼には、やっぱり温泉への夢は去り難く、三度目のボーリングを開始、信州大学工学部教授の指導により、電波探知機を使い、ホテルの裏手に湯脈を発見、発掘しましたが、温度が低すぎて又もや失敗。資金不足と精神的な疲労はその極に達していました。

こんな折り、肩を落とす彼に「せつかくここ迄やっちゃったのだから、諦めないでもっと掘ってみらっしゃい」という妻の一言に、最後の力を振りしぼりさらに二五〇メートル掘り下げました。その時、遂に待望の「五十度」の熱量の湧出に成功したのです。二十年の夢がかない夫婦は手を取り合って涙を流しました。そして思わず彼は発掘現場の屋根に、日の丸の旗をかかげていました。

こうして強い精神力と行動力が実を結び、「志賀ヒュッテ」から「内湯・志賀旅館」さらに「木戸池温泉ホテル」と名称を変え増改築を続けて来ました。その後、人一倍志賀高原への愛着の深かった彼は次々と全山の開発、発展にも夢をたくし、その生涯をかけました。

今、人々に愛され親しまれる、深い緑と白樺ゆれる木戸池と、そのほとりにたたずむ木戸池温泉ホテルを改めて振り返るとき、今昔の感ひとおおです。



湖畔のほとり、現在の木戸池温泉ホテル

※本文中の資料等は丹羽三好氏の「小林信義君を語る」他「和合会誌」「山ノ内町誌」等を参考にいたしました。